

(七八) 正絹

年代 大正初期

布名 正絹

用途 女児三尺

大正初期の女児の三尺帯に用いたという。紫地の絞り染めとなっている。年代は合わないが、用途から和子が着用したと思われる。端布の幅が一六・二cm、長さが二三・四cm。



写真78 正絹

(七九) 綸子

年代 昭和

布名 紋綸子(もんりんず)

用途 道行コート

昭和の道行コートに用いたという。地と地模様で菱と菊を織りだしている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・二cm、長さが二三・四cm。



写真79 綸子

(八〇) 羽二重

年代 昭和

布名 羽二重(はぶたえ)

用途 コート裏地

コート裏地に用いた昭和の生地。白地、菱に七宝や菊がプリントされている。年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・三cm、長さが二四・〇cm。



写真80 羽二重

(八一) 木綿

年代 昭和

布名 木綿

用途 ゆかた

昭和の浴衣地。紺地に、雲文に萩の絞り染め。年代と用途からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一五・八cm、長さが二三・三cm。



写真81 木綿

(八二) 木綿

年代 昭和

布名 木綿

用途 もんべ外

もんべに用いた昭和の生地。紺地に、紺模様が織られている。年代と用途からシナが着用したといえる。端布の幅が一五・八cm、長さが二三・三cm。



写真82 木綿

(八三) 綸子

年代 昭和初期

布名 紋綸子(もんりんず)

用途 コート裏地

コート裏地に用いた昭和初期の生地。赤地に、市松や格子などの紋地に織られている。年代と用途からシナが着用したと考えられる。端布の幅が一五・二cm、二〇・二cm。



写真83 綸子

(八四) 黄八丈

年代 昭和

布名 黄八丈

用途 和服

和服に用いた昭和の記事。紺地に橙の格子柄が織られている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一・八cm、長さが二四・三cm。



写真84 黄八丈

(八五) 銘仙

年代 昭和

布名 銘仙

用途 丹前

丹前に用いた昭和の生地。黄色地に格子柄が織られている。これはシナが、来客用の丹前としてあつらえた。現在も、利用されている(図版II-1)。端布の幅が一八・一cm、長さが二一・八cm。



写真85 銘仙

(八六) 木綿

年代 昭和

布名 木綿

用途 えりと肩あて

丹前の襟と肩当て

に用いた昭和の生地。

紺地に縞とえんじの

無地。家族用か、来

客用かは不明。縞模

様の幅が、一二・六

cm、長さが二一・二

cm。無地の幅が八・

七cm、長さが二四・

五cm。

(八七) 木綿

年代 昭和

布名 木綿

用途 敷布団

敷布団に用いた昭

和の生地。市松と横

縞に織られている。

家族用か、来客用か

は不明。縞模様の幅

が一五・五cm、長さ

が二三・二cm。



写真87 木綿



写真86 木綿

(八八) 銘仙

年代 昭和中期

布名 銘仙

用途 掛ふとん鏡

付箋によると、掛

布団に用いた昭和中期

の生地。橙地に菊

と桐が織られている。

家族用か、来客用か

は不明。端布の幅が

一二・九cm、長さが

二二・二cm。

(八九) 木綿

年代 戦前戦後

布名 木綿(かすり)

用途 日常着

戦前から戦後に

かけての生地。日

常着に用いたとい

う。紺地に白の縞

となっている。使

用者はシナか。端

布の幅が一七・五

cm、長さが二二・

三cm。



写真89 木綿



写真88 銘仙

(九〇) 木綿

年代 昭和一五〜二五

布名 木綿(かすり)

用途 日常着

日常着に用いた一九四〇(昭和一五)年から一九五〇年にかけての生地。紺地に井桁など拵となっている。使用者は不明。端布の幅が一六・一cm、長さが一九・一cm。

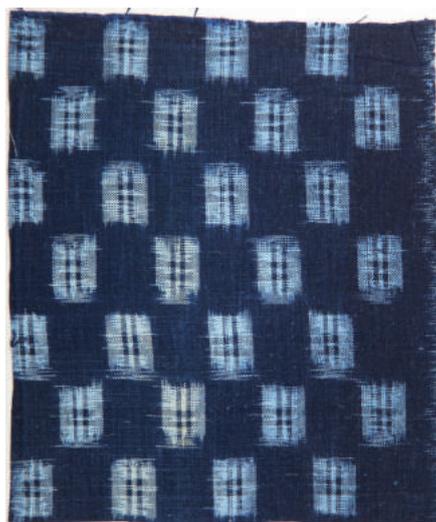


写真90 木綿

(九一) 綸子

年代 戦後

布名 紋綸子(もんりんず)

用途 コート羽織裏

コートや羽織の裏地に用いた戦後の生地。桃色地に銀、緑灰、ピンクの市松と縞の紋地となっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。地には万字の紗綾形紋がある。端布の幅が一七・〇cm、長さが二一・一cm。



写真91 綸子

(九二) 正絹

年代 昭和三〇年頃

布名 正絹

用途 羽織裏

羽織の裏地に用いた一九五五(昭和三〇)年頃の生地。桃色地に菊などがプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・七cm、長さが一八・八cm。



写真92 正絹

(九三) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 八掛

付箋に八掛とあることから、長着裏の裾取りに用いた昭和初期の生地。桃色地。使用年代からシナが着用したと考えられるが、合わせた長着は不明。端布の幅が一五・〇cm、長さが二二・三cm。

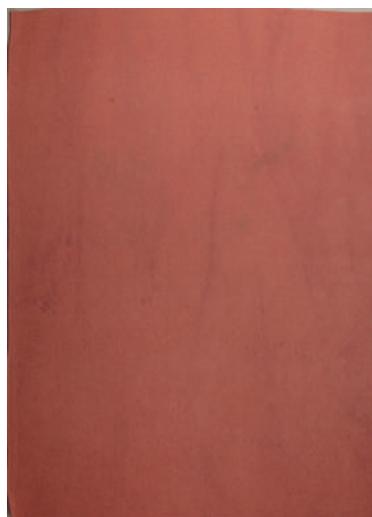


写真93 縮緬

(九四) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 八掛

長着裏の裾取り

に用いた昭和初期の生地。薄紫地。使用年代から邦義かシナが着用か。端布の幅が一三・六cm、長さが二二・八cm。

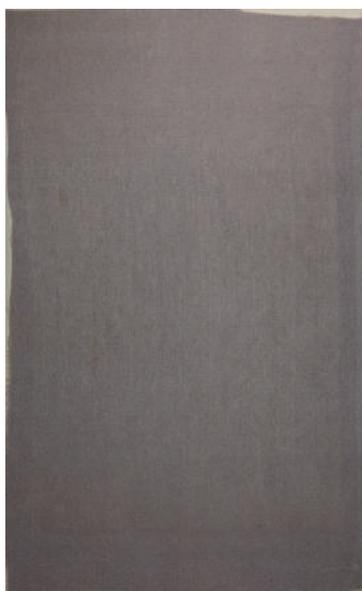


写真94 縮緬

(九五) 縮緬

年代 大正

布名 縮緬(ちりめん)

用途 八掛

長着裏の裾取り

に用いた大正の生地。淡いラクダ色地。使用年代から邦義かシナが着用したと考えられる。端布の幅が一六・八cm、長さが二二・六cm。



写真95 縮緬

(九六) 化学繊維

年代 戦後

布名 化学センチ(かせん)

用途 着物

着物に用いた戦

後の化学繊維の生地。灰地に色緋となっている。使用年代や用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・八cm、長さが二二・六cm。



写真96 化学繊維

(九七) モスリン

年代 昭和中期

布名 モスリン

用途 長襦袢

長襦袢に用いた

昭和中期の生地。赤無地。使用年代や用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・〇cm、長さが二一・三cm。



写真97 モスリン

(九八) モスリン

年代 昭和後期

布名 モスリン

用途 長襦袢

長襦袢に用いた昭和後期の生地。白地に鶴、梅、楓、雲などがプリントされている。使用年代や用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一四・二cm、長さが一九・五cm。



写真98 モスリン

(九九) モスリン

年代 昭和初期

布名 メリンス

用途 男児着物

男児着物に用いた昭和初期の生地。白地に菱、太鼓、鯉、軍扇、団扇などがプリントされている。使用年代や用途から邦之用と思われる。端布の幅が一四・〇cm、長さが二三・六cm。



写真99 モスリン

(一〇〇) モスリン

年代 昭和初期

布名 メリンス

用途 男児着物

男児の着物に用いた昭和初期の生地。白地によるけ縞、井桁などがプリントされている。使用年代や用途から邦之用と思われる。端布の幅が一七・六cm、長さが二三・二cm。



写真100 モスリン

(一〇一) 縮み

年代 戦後

布名 夏物ちぢみ

用途 着物

夏物に用いた戦後の生地。紺地に黄の市松、金の縞模様織られている。使用年代からシナと思われる。端布の幅が一・八cm、長さが二・六cm。



写真101 ちぢみ

(101) 紬

年代 大正初期

布名 紬(つむぎ)

用途 着物

着物に用いられた大正初期の生地。黒地に四角を重ねた縞模様が織られている。縁は、傷みが進んでいる。使用年代からシナが着用か。端布の幅が一〇・九cm、長さが一三・四cm。



写真102 紬

(103) 錦紗

年代 大正

布名 錦紗(きんしゃ)

用途 羽織

羽織に用いた大正の生地。紫地に透かし織り。経緯とも細い生糸で織られており、滑らかで光沢がある。使用年代からシナが着用か。端布の幅が一七・九cm、長さが一七・二cm。



写真103 錦紗

(104) 紬

年代 戦後

布名 紬(古牧織)

用途 コート

コートに用いた戦後の生地。薄紫の無地。古牧織保存会による「古牧織の由来」というラベルがある。使用年代と用途からシナが着用したものと思われる。端布の幅が一七・六cmと一八・〇cm、長さが七・〇cmと一二・一cm。



写真104 紬

(105) 正絹

年代 戦後

布名 正絹

用途 コート

コートに用いた戦後の生地。紫地に赤の縞模様となっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・八cm、長さが一九・七cm。



写真105 正絹

(一〇六) 正絹

年代 戦前

布名 正絹

用途 羽織裏地

羽織に用いた戦前の裏地。白地に朱や薄緑の市松、一つ飛びの枺目に模様がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用か。端布の幅が一六・五八cm、長さが一六・五cm。



写真106 正絹

(一〇七) 化学繊維

年代 戦後

布名 興人モスリン

用途 裏地 掛布団裏地

羽織の裏地に用いた戦後の生地。薄茶無地。興人とあることから、人絹（人造絹糸）で、いわゆる化学繊維と思われる。使用年代と用途から、家族用と思われる。端布の幅が一六・九cm、長さが一七・三cm。



写真107 化学繊維

(一〇八) モスリン

年代 昭和初期

布名 メリンス

用途 下着

下着に用いた昭和初期の生地。橙無地。使用年代と用途からシナが着用か。端布の幅が一五・〇cm、長さが二一・九cm。



写真108 モスリン

(一〇九) 化学繊維

年代 戦後

布名 木綿（化セン）

用途 着物

着物に用いた戦後の生地。布名に木綿とあるが、括弧の化繊が正しい。紺地に模様が織り込まれている。使用年代と用途からシナが着用したものであると思われる。端布の幅が二五・六cm、長さが二〇・八cm。



写真109 化学繊維

(一一〇) ウール

年代 戦後

布名 サマーウール

用途 夏一重

夏用の単衣に用

いた戦後の生地。

黒地に緋模様が織

り込まれている。

使用年代と用途か

らシナが着用か。

端布の幅が一・

五cm、長さが二

二・〇cm。

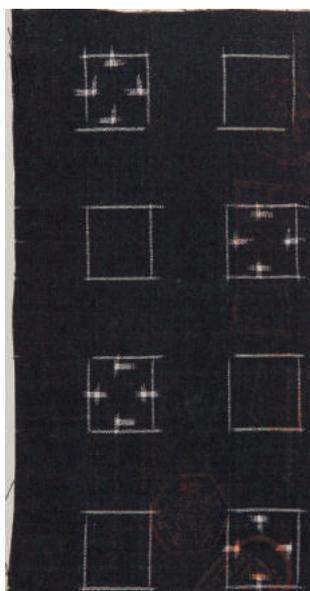


写真110 ウール

(一一一) 絹

年代 大正

布名 縞絹

用途 喪服

喪服に用いた大

正の生地。黒地に

縞模様。使用年代

と用途からシナが

着用したものと思

われる。端布の幅

が一五・八cm、長

さが二一・三cm。



写真111 絹

(一一二) 正絹

年代 昭和戦後

布名 正絹

用途 コート(喪の時)

コートに用いた戦後

の生地。黒地に波模様。

使用年代と用途からシ

ナが着用したものと思

われる。端布の幅がし

一一・五cm、長さが二

一・九cm。



写真112 正絹

(一一三) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 戦後・染かえ羽織

羽織に用いた昭和初

期の生地。戦後には染

め変えをしている。白

地に密になった唐草風

の模様などがプリント

されている。使用年代

と用途から、シナが着

用したものと思われる。

端布の幅が一八・一cm、

長さが一七・四cm。

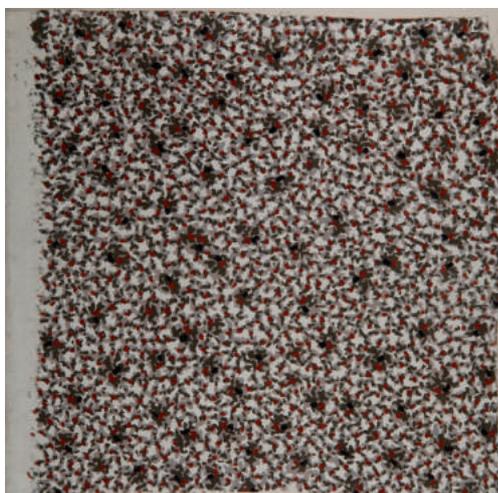


写真113 縮緬

(一一四) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 戦後・染かえ羽織

羽織に用いた昭和初期の生地。戦後には染め変えをしている。模様は、白地に密になった唐草などがプリントされている。使用年代と用途から、シナが着用したものと思われる。端布の幅が一七・〇cm、長さが二二・三cm。

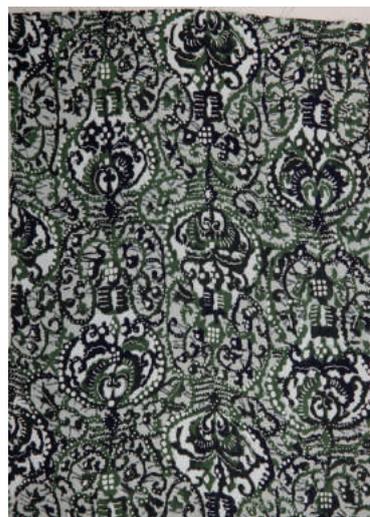


写真114 縮緬

(一一五) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 羽織(染変え)

羽織に用いた昭和初期の生地。戦後には染め変えをしている。模様は、白地に楓と牡丹などがプリントされている。使用年代と用途から、シナが着用したものと思われる。端布の幅が一五・五cm、長さが二二・一cm。

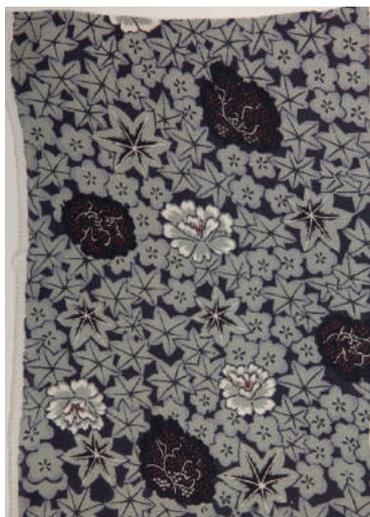


写真115 縮緬

(一一六) 縮緬

年代 昭和初期

布名 縮緬(ちりめん)

用途 戦後染変え羽織

羽織に用いた昭和初期の生地。戦後には染め変えをしている。模様は、白地に密になった唐草などがプリントされている。使用年代と用途から、シナが着用したものと思われる。端布の幅が一五・〇cm、長さが二三・七cm。

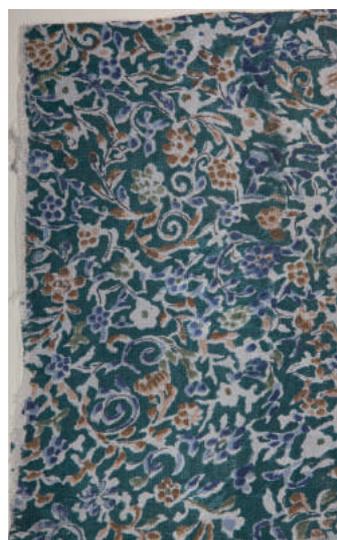


写真116 縮緬

(一一七) 化学繊維

年代 戦後

布名 カセン

用途 コート

コートに用いた昭和初期の生地。紫紺地に幾何学模様となっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一七・一cm、長さが一五・五cm。



写真117 化学繊維

(一一八) 化学繊維

年代 戦後

布名 カセン

用途 着物

着物に用いた昭和初期の生地。黒地に赤、黄、青など多色の丸状の拵と、縞に織られている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一八・一cm、長さが一五・三cm。

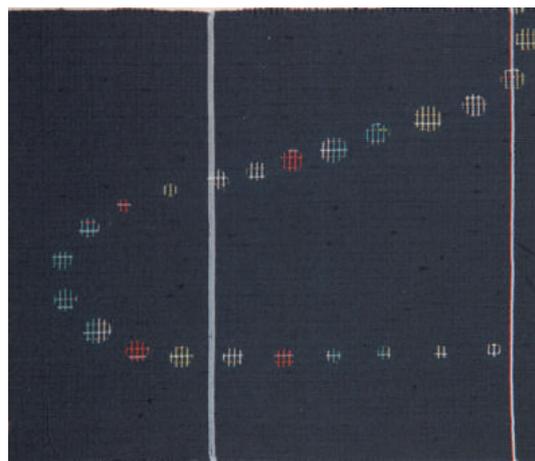


写真118 化学繊維

(一一九) 正絹

年代 戦後

布名 正絹

用途 裏地 (コート)

コートの裏地に用いた戦後の生地。白地に赤、黒、緑の横縞がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一八・〇cm、長さが一八・二cm。



写真119 正絹

(一二〇) 羽二重

年代 昭和初期

布名 羽二重 (はぶたえ)

用途 羽織裏

羽織の裏地に用いた昭和初期の生地。薄橙色地に模様がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用か。端布の幅が一三・八cm、長さが二二・〇cm。

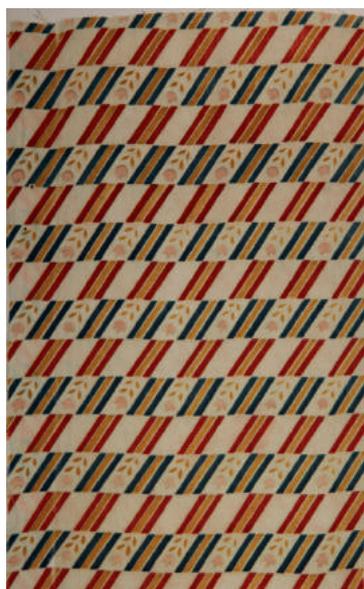


写真120 羽二重

(一二一) 羽二重

年代 大正

布名 羽二重 (はぶたえ)

用途 男性裏地

男性用着物の裏地に用いた大正の生地。黒無地。使用年代と用途から邦義が着用したと思われる。端布の幅が一八・二cm、長さが二三・〇cm。



写真121 羽二重

(一一二) 羽二重

年代 大正

布名 羽二重(はぶたえ)

用途 裏地

着物の裏地に

用いた大正の生地。黒無地。使用年代と用途から邦義が着用と思われる。端布の幅が一七・八cm、長さが二四・三cm。



写真122 羽二重

(一一三) 羽二重

年代 大正

布名 羽二重(はぶたえ)

用途 八掛

長着の裏裾に

用いた大正の生地。赤紫色無地。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一八・六cm、長さが二二・七cm。



写真123 羽二重

(一二四) モスリン

年代 大正

布名 メリンス

用途 八掛外

掛布団裏地

長着の裏裾や掛布団の裏地に用いた大正の生地。橙無地。家族用のものか。端布の幅が一四・八cm、長さが二二・九cm。



写真124 モスリン

(一二五) 綸子

年代 戦後

布名 紋綸子(もんりんず)

用途 訪問着

訪問着に用いた戦

後の生地。紺地に御所車や撫子などの紋織りとなっている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・二cm、長さが一九・〇cm。



写真125 綸子

(二二六) ウール

年代 戦後

布名 ウール

用途 日常着

日常着に用いた戦後の生地。紺地に渦巻きと丸文がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一八・五cm、長さが二三・二cm。



写真126 ウール

(二二七) ウール

年代 戦後

布名 ウール

用途 着物

着物に用いた戦後の生地。濃い灰色地に唐草模様に織られている。使用年代と用途からシナが着用したと思われる。端布の幅が一六・三cm、長さが二〇・七cm。



写真127 ウール

(二二八) ウール

年代 戦後

布名 ウール

用途 着物

着物に用いた戦後の生地。紺地に縞と井桁に織られている。使用年代と用途からシナが着用か。端布の幅が一四・七cm、長さが二〇・二cm。

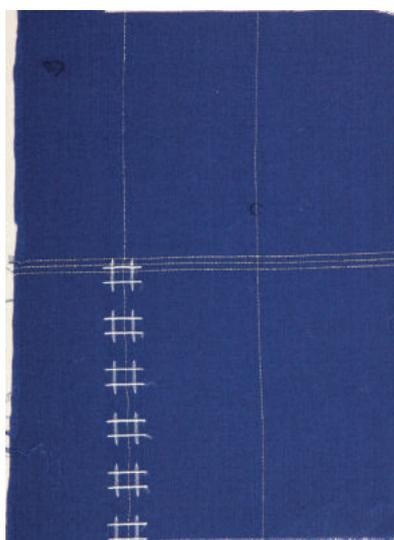


写真128 ウール

(二二九) お召し

年代 戦後

布名 うすお召

用途 外出着

外出用の着物に用いた戦後の生地。青地に格子と唐草がプリントされている。使用年代と用途からシナが着用か。端布の幅が一六・一cm、長さが二三・七cm。



写真129 お召し

(1110) お召し

年代 戦後

布名 うすお召

用途 右の紋様が手洗いで落ちました。

一二九番と同じ紋様であつたという生地。整理のため洗濯した際に、格子の模様は残つたが、透かし状の唐草文が落ちてしまった。端布の幅が、一五・九cm、長さが二・五cm。



写真130 お召し

(1111) 羽二重

年代 大正五年に網走町丸越呉服店にて求む90銭

布名 羽二重

用途 羽織裏

この生地は、二番と同じもので、一九一六（大正五）年に入手した羽織の裏地である。ただ紺無地、灰色地に格子、肌色の配色は二番と同じながら、主要な絵柄は、宝尽くしではなく、富士と松となっている。端布の幅が一六・五cm、長さが



写真131 羽二重

二〇・一cm。

一枚目の付箋に、「後藤邦義17才（日記より）」とあることから、この端布帳を作成するにあたって、寄贈者が後藤邦義による「大正五年度日記」を読み込んで整理していたことが理解できる。さらに、二枚目の付箋には、「絵師甚七と記されていますがお会いしてみとうございます。」、三枚目の付箋には、「義父、後藤邦義大正5年網走支庁勤務時代 一年間の日記 江別市情報図書館にコピー寄贈」と日記の所在についても記載している。

布地帳では、この一三一番と二番の裏地が、「大正五年度日記」の一月二六日に記された羽織裏であるとしている。

### 五 後藤邦義の「大正五年度日記」にみられる衣服に関する記述

「大正五年度日記」（以下「日記」と表記）は、一九一六（大正五）年一月一日から、日付と天気、その日の出来事が、日によって分量に差はあるものの毎日記されている。内容は網走支庁での自身の業務が最も多く、支庁での出来事に関する事なども記されている。休日には読書や活動写真を見に行くほか、夏になれば釣りや海水浴、秋には同僚と三眺山や能取湖に出かけるなど、楽しい様子が伝わる。

同年に網走であつた出来事として、近隣の神社の祭礼や九月の共進会、一月一七日頃に鯛の大群が波打ち際まで現れ、老若男女が取りに行ったという事件、その後に起こった暴風による被害などに関する記述もある。特に共進会については、準備の進捗や当日の様子について詳しく書かれており、当時を知る貴重な資料といえる。

本項では、この「日記」中に見られる衣生活、特に衣服に関わる記述を紹介する。

衣類の調達は、五月二二日の記述が最初である。退庁後に袷が幾ら位かかるか「高田」に尋ね、普通のもので四円かかるとの回答を得ている。同月二五日には実家から手紙と共に袷が送られたため「高田」に依頼しての新調はしていない。

六月六日にはシャケ一枚、兵児帯一本を購入し、併せて九〇銭支払っている。同月二二日には俸給の残金で「吉野」から袷一枚を購入し、二四日の夜に「長井さん」のところに仕立てを依頼、三日後の二七日には袷が出来上がっている。

九月二日には実家から袴が送られ、十一月四日には同僚宅にて着物の寸法をとり、十二月九日に着物を受け取っている。

十二月二六日には、次のおり反物など衣類の購入についての記載がある。

夜、丸越呉服店に行き買物す。  
 伊予絣 二反 四円九十 銭  
 セル 一反 二円六十九 銭  
 下着地 一反 九十 銭  
 羽織裏 九十 銭  
 シャケ 二枚 一円四十 銭  
 裏地 一反 一円二十五 銭  
 等にて十二円七十銭を支払う。

翌二七日には「長井さん」に着物の仕立てを、「藤井さん」に袴の仕立てを依頼するがいずれも断られている。

洗濯についても複数記述がある。具体的に衣類が記されているのは二月六日と五月一四日である。前者では浴衣と袴二枚、後者では浴衣にシャツ二枚とある。

同年に新調した衣類のうち、仕立てたのは袷衣と袴であり、シャツや兵児帯

は既製品を購入している。また、袷衣と袴については、実家から送られた分もある。単衣を仕立てたり、購入したりという記述は見られないが、九月五日に「近頃はめつきり寒さが増した。もう袷を着なけりはとて駄目だ」（原文ママ）とあることから、それ以前には単衣も着ていたと推測される。なお衣替えに関して明確にわかる記述はないが、六月六日には「近頃は随分と暖になった。役所で仕事して居っても着物は三枚足もはかずとも何ともない。」（原文ママ）とあり、この頃に着る枚数を減らしたものと思われる。

さらに、この年の邦義の服装は、夏期の単衣、冬期の袷と和服が中心であったことが理解できる。

## 六 布地帳の特徴について

布地帳は、表1に示したように、錦紗が二枚、綸子が五枚、縮緬が九枚、紬が七枚、黄八丈が一枚、八反が一枚、絹が三枚、お召しが二枚、紅絹が一枚、羽二重が一二枚、富士絹が五枚、正絹が一二枚、銘仙が一二枚、羅が一枚、縮みが一枚、モスリン（メリンス）が三五枚、セル地が三枚、ウールが四枚、別珍が一枚、木綿が七枚、人絹などの化学繊維が六枚あり、不明一枚を含めて二二品種一三一枚の生地が端布からなっている。ただ、一三一枚の端布の内、銘仙の一番と一九番、羽二重の二番と一三番、お召しの一二九番と一三〇番は、同じ生地であることから、点数的には二二品種一二八枚となる。また、二二品種の内、錦紗から縮みまでの一五品種七四枚が絹織物である。

また、モスリンからウールまでの三品種四二枚が毛織物である。木綿地は、別珍と木綿の八枚となっている。その他、人造絹糸など化学繊維の六枚や不明の一枚がある。これらを明治、大正、昭和と、三つの時代区分で分けると、明治が一枚、大正が五六枚、昭和が七四枚である。数値的には、大正から昭和にかけて家族が増えることで、衣類も増えたことに比例しているといえる。

後藤家の生地時代の利用についてみると、大正期には、錦紗、縮緬、紬、絹、

表1 布地の時代区分

NO.	布総称	点数	明治			大正			昭和		
			初	中	後	初	中	後	初期・戦前	中期・戦後	後半
1	錦紗	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	縮子	5	0	0	0	0	0	0	1	2	0
3	縮緬	9	0	0	0	0	0	0	6	0	0
4	紬	7	0	0	0	1	0	0	0	1	0
5	黄八丈	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	八端	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
7	紹	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	お召し	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0
9	紅絹	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	羽二重	12	0	0	0	2	0	0	2	0	0
11	富士絹	5	0	0	0	1	0	0	2	0	0
12	正絹	12	0	0	0	0	0	2	4	3	1
13	銘仙	12	0	0	0	1	0	0	0	1	0
14	羅	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	縮み	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
16	モスリン	35	0	0	0	0	0	13	15	1	3
17	セル地	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	ウール	4	0	0	0	0	0	0	0	4	0
19	別珍	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	木綿	7	0	0	0	0	0	0	1	1	0
21	化学繊維	6	0	0	0	0	0	0	1	5	0
22	不明	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	合計	131	0	0	0	5	0	4	34	21	17
	3期小計		1			56					74

紅絹、羽二重、銘仙、羅、セル地、別珍がみられ縮緬、富士絹、正絹、モスリン、木綿は、昭和のほうが多く使われている。また、昭和期には、縮子、黄八丈、八反、お召し、縮み、ウール、人造絹糸などの化学繊維が新たに活用されている。

三期の生地品種の内訳は、次のとおりとなる。

明治（一枚）

番と三八番のモスリンがあり、邦之用の布団鏡と額縁であったという。

このほか、使用年代や用途から着用者が明確なのは、二九番のセル地の着物で、シナが女学校の通学用として着用していた。邦義が着用したと考えられるのは、モスリンの三番と二三番で、男性用の袴裃や着物としていた。さらに、紬の一二番は街着、正絹の九番と六九番が男性の袴や袴裃袖、羽二重の七〇番と二二番が八掛や裏地としていた。

明治（一九六八〜一九二二）には、縮緬が一枚（一六番）ある。この年代と女性用の模様であることから、シナ本人が利用した生地と考えられる。ただし、この生地は、染め変えられて再利用された後の端布であるため、当初の所有者や利用形態は不明である。

大正（五六番）

大正（一九二二〜一九二六）には、錦紗が一枚（二〇三番）、縮緬が二枚（四番、九五番）、紬が六枚（一〇二番、一二番、一七番、一八番、二六番、三三番）、紹が二枚（五六番、一一一番）、紅絹が一枚（五番）、羽二重が八枚（二番、一三二番、八番、一五番、七〇番、一一一番、一二二番、一二三番）、富士絹が二枚（七三番、三六番）、正絹が三枚（七七番、七八番、六九番）、銘仙が二枚（一番、一九番）、二五番、三四番、三五番）、羅が一枚（六八番）、モスリンが一枚（三七番、三八番、三番、六番、七番、一三番、二七番、二八番、三一番、三二番、五七番、五八番、七二番、七二番、一二四番）、セル地が三枚（一四番、二九番、三〇番）、別珍が一枚（二〇番）、木綿が一枚（一一番）となっている。

生地の年代が明らかなのは、一九二六（大正五）年製の二番と一三一番の羽二重で、邦義の羽織裏に用いたものである。また、一九一八年製の一番と一九番の銘仙も同じ生地であり、シナが女学校の卒業式の着物にしたという。さらに、三六番の富士絹は、一九二五年製であり、長男邦之の二つ身に用いたものである。同年製の生地には、三七

大正では、男性用が邦義、女性用がシナ、幼児用が長男邦之となるが、この時代シナが利用した生地が多く残っている。

#### 昭和（七四枚）

昭和（一九二六～一九八九）には、昭和初期から戦後を経て一九五五（昭和三〇）年までの生地を扱っている。この時代の生地は、錦紗が一枚（六四番）、綸子が五枚（八三番、九一番、一二五番、六一番、七九番）、縮緬が六枚（九三番、九四番、一一三番～一一六番）、紬が一枚（一〇四番）、黄八丈が一枚（八四番）、八端が一枚（四九番）、絹が一枚（六二番）、お召しが二枚（一二九番、一三〇番）、羽二重が四枚（五二番、一二〇番、四二番、八〇番）、富士絹が三枚（三九番、五二番、六三番）、正絹が九枚（九番、四八番、六六番、一〇六番、一〇五番、一一九番、一二二番、九二番、六〇番）、銘仙が二枚（八八番、八五番）、縮みが一枚（二〇二番）、モスリンが二〇枚（四一番、五〇番、七四番、一〇八番、四三番、五三番、七五番、四四番、五四番、九九番、五五番、四七番、六五番、一〇〇番、七六番、九七番、九八番、四〇番、四五番、四六番）、ウールが四枚（一一〇番、一二六番～一二八番）、木綿が六枚（九〇番、八九番、八一番、八二番、八六番、八七番）、人造絹糸が一枚（六七番）、化学繊維が五枚（九六番、一〇七番、一〇九番、一一七番、一一八番）、不明が一枚（五九番）である。

生地の年代が明らかなのは、長女和子が生まれた一九二七年製の富士絹の三九番で、女兒の四つ身としている。また、次男孝男が生まれた一九三三年製のモスリンは、男児用の一つ身としている。

使用年代や用途からみると、昭和初期においては、男性用が邦義、女性用がシナ、モスリンの九九番と一〇〇番の男児着物は長男邦之のものとなる。また、モスリンの五〇番、七四番、七五番の女児着物は長女和子が着用したものである。さらに、この頃の乳幼児の衣服は次男孝男である。

次に、一九四五年頃から一九五五年頃においては、次男孝男が男児用、次女淳子が乳幼児用の衣服となっている。

昭和中期以降、邦義の端布の量は少なくなっており、後藤家ではシナを除いて家族の洋装化が進んでいたと思われる。

#### まとめにかえて

これまで、大正から昭和にかけてのおおよそ半世紀にわたる後藤家の衣生活の一端を一一二枚の端布の写真をとおして紹介するとともに、明治生まれの主婦であるシナが、和装から洋装が広まる大正期以降において、どのような衣服のあゆみをたどったのかを、裁縫で残された端布を綴った布地帳をもとに考察してきた。特に端布の年代を明治期、大正期、昭和期の三期に細分して、布地と用途を分類、比較した結果、後藤家の布地帳には次の特徴があることが理解できる。

端布の年代は、明治期が一枚、大正期が五六枚、昭和期が七四枚であり、半数以上が昭和期の生地となっている。これは、大正期には婚姻と長男の誕生があり、昭和期には長女、次男、次女が誕生するなど、後藤家の家族構成が増えたことに比例するといえる。

使用時期と用途から布名を区分すると、大正期には紬、羽二重、銘仙、モスリンと夫婦の着物が多くみられる。昭和期には、モスリン、ウール、木綿、化学繊維と生地の種類が多様になる。さらに、昭和期の端布には、邦義や特に男児の着物地が少ない。子どもの着物は、お下がりや繕い直しにより再生されることから、布地帳の端布は後藤家の衣生活の実態をすべて示しているとはいえない。しかし、子ども用の着物でも富士絹やモスリンなどの乳児用の衣服は、四人分がすべて残されていた。布地帳の趣意書きにもあるように、製作にあたって一九五五年以降の化学繊維の端布が除かれており、シナの一生涯の生地の割合までを示すことは難しい。しかしながら、布地帳の端布の情報から、着物を通じたシナに対し、邦義、邦之、孝夫の三人の和服は少なく、後藤家ではまず男性の洋装化が進んでいたと考えられる。

一方、この布地帳は、単に個人の好みや家族のくらしぶりだけではなく、明治、大正、昭和の繊維の流れ、特に昭和期に生地のパリエーションが増えていることが理解できる。あわせて、同時代の普段着、外出着に用いる生地の移り変わりも示している。

今後、家族の写真やシナ作りの押し絵（写真132）などの小物製品の生地を補足調査するとともに、端布の色や柄の流行を検討することで、シナ、和子、淳子の端布を特定し、後藤家の高度経済成長期までの衣生活の変化の事例を明らかにしたいと考える。



写真132 シナ製作の押し絵

## 註

(1) 翻刻したデータは、後藤正子氏に提供している。

## 謝辞

この「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」を進めるにあたり、本稿では次の方々から神社の祭祀などの聞き取りや資料の提供などで数多くのご教示をいただきました。

後藤正子氏、後藤道子氏、真坂隆太氏、江別市郷土資料館、江別市情報図書館。

また、当館の山田伸一氏には、大正期の新聞広告を提供いただきました。さ

らに、櫻井万里子氏には図書の貸借、吉原玲英子氏には布地付箋のデータ入力とスキヤニングなどにご尽力いただきました。ここに記して厚く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 安藤裕子「新聞雑誌記事にみる「銘仙」について」、『学苑近代文化研究所紀要』NO. 八六三、二〇一一（五九頁～一三二頁）。
- 江別市総務部編『えべつ昭和史』（株式会社アイワード、一九九五）。北田正弘「ニコニコ」とその由来」、『横浜骨董ワールドガイドブック』、二〇〇二（三六頁～四二頁）。
- 北村哲郎『日本の文様』、（株式会社源流社、一九八八）。
- 北村哲郎『続・日本の文様』、（株式会社源流社、一九八八）。
- 北村哲郎『日本の織物』、（株式会社源流社、一九八八）。
- 北村哲郎『日本服飾小辞典』、（株式会社源流社、一九八八）。

表2 資料リスト

番号	総称	年代	用途	備考
1	銘仙	大正7年	女学校卒業式着用	シナ
2	羽二重	大正5年	男性羽織裏	邦義
3	モスリン	大正	男性の襦袢	
4	縮緬	大正	戦後染めかえ着物	
5	紅絹	大正	裏地	
6	モスリン	大正	長襦袢	
7	モスリン	大正	襦袢	
8	羽二重	大正	男女兼用和服	
9	正絹	昭和初期	袴	図版Ⅱ-2と柄違い
10	別珍	大正	丹前襟(えり)	
11	木綿	大正	丹前	
12	紬	大正	街着(男性)	邦義
13	モスリン	大正	着物(男性)	
14	セル地	大正	綿入れ袴纏	図版Ⅱ-3
15	羽二重	大正	留袖の長襦袢	
16	縮緬	明治	戦後染めかえ	
17	紬	大正	羽織	
18	紬	大正	和服	
19	銘仙	大正	女学校卒業式に着用	シナ
20	銘仙	大正	和服	
21	銘仙	大正	着物	
22	銘仙	大正	着物	
23	銘仙	大正	街着	
24	銘仙	大正	外出着	
25	銘仙	大正	着物	
26	紬	大正	街着	
27	モスリン	大正	単衣着物	
28	モスリン	大正	単衣着物	
29	セル地	大正	女学校通学着用	シナ
30	セル地	大正	もんべ上下外	
31	モスリン	大正	長襦袢	
32	モスリン	大正	長襦袢	
33	紬	大正	道行コート外	図版Ⅱ-4
34	銘仙	大正	羽織	図版Ⅱ-5
35	銘仙	大正	ねんねこ外	
36	富士絹	大正14年	男児一つ身	邦之
37	モスリン	大正14年	男児用布団の鏡	邦之
38	モスリン	大正14年	男児用布団の額縁	邦之
39	富士絹	昭和2年	女児四つ身	和子
40	モスリン	昭和	四つ身裏地と紐	
41	モスリン	昭和8年	男児用一つ身	孝男
42	羽二重	昭和	裏地	
43	モスリン	昭和初期	着物	
44	モスリン	昭和初期	着物	
45	モスリン	昭和	着物	
46	モスリン	昭和	着物	
47	モスリン	昭和初期	着物	
48	正絹	昭和初期	着物	
49	八端	昭和初期	和服	
50	モスリン	昭和初期	女児着物、後・長襦袢	
51	羽二重	昭和初期	長襦袢のお袖	
52	富士絹	昭和初期	羽織の裏地	
53	モスリン	昭和初期	単衣夏物	
54	モスリン	昭和初期	夏物	
55	モスリン	戦前	帯	
56	絹	大正	夏帯	
57	モスリン	大正	長襦袢	
58	モスリン	大正	着物	
59	不明	昭和初期	帯(ミシン刺繍)	
60	正絹	昭和	半えり	
61	綸子	昭和	コート裏地	
62	絹	昭和	夏物襦袢	
63	富士絹	昭和	女学生晴着	
64	錦紗	昭和	女児晴着	
65	モスリン	昭和初期	和服日用着	
66	正絹	昭和初期	羽織	

番号	総称	年代	用途	備考
67	人絹	昭和初期	羽織	
68	羅	大正	夏物	
69	正絹	大正	夏用襦袢のお袖	邦義
70	羽二重	大正	男性用八掛	
71	モスリン	大正	着物	
72	モスリン	大正	襦袢	
73	富士絹	大正	襦袢のお袖	
74	モスリン	昭和初期	女児着物	
75	モスリン	昭和初期	女児着物	
76	モスリン	昭和戦前	帯	
77	正絹	大正初期	女児三尺	
78	正絹	大正初期	女児三尺	
79	綸子	昭和	道行コート	
80	羽二重	昭和	コート裏地	
81	木綿	昭和	ゆかた	
82	木綿	昭和	もんべ外	
83	綸子	昭和初期	コート裏地	
84	黄八丈	昭和	和服	
85	銘仙	昭和	丹前	図版Ⅱ-1
86	木綿	昭和	えりと肩あて	
87	木綿	昭和	敷布団	
88	銘仙	昭和中期	掛ふとん鏡	
89	木綿	戦前戦後	日常着	
90	木綿	昭和15~25	日常着	
91	綸子	戦後	コート羽織裏	
92	正絹	昭和30年頃	羽織裏	
93	縮緬	昭和初期	八掛	
94	縮緬	昭和初期	八掛	
95	縮緬	大正	八掛	
96	化学繊維	戦後	着物	
97	モスリン	昭和中期	長襦袢	
98	モスリン	昭和後期	長襦袢	
99	モスリン	昭和初期	男児着物	
100	モスリン	昭和初期	男児着物	
101	縮み	戦後	着物	
102	紬	大正初期	着物	
103	錦紗	大正	羽織	
104	紬	戦後	コート	
105	正絹	戦後	コート	
106	正絹	戦前	羽織裏地	
107	化学繊維	戦後	裏地 掛布団裏地	
108	モスリン	昭和初期	下着	
109	化学繊維	戦後	着物	
110	ウール	戦後	夏単衣	
111	絹	大正	喪服	
112	正絹	昭和戦後	コート(喪の時)	
113	縮緬	昭和初期	戦後・染かえ羽織	
114	縮緬	昭和初期	戦後・染かえ羽織	
115	縮緬	昭和初期	羽織(染変え)	
116	縮緬	昭和初期	戦後染変え羽織	
117	化学繊維	戦後	コート	
118	化学繊維	戦後	着物	
119	正絹	戦後	裏地(コート)	
120	羽二重	昭和初期	羽織裏	
121	羽二重	大正	男性裏地	
122	羽二重	大正	裏地	
123	羽二重	大正	八掛	
124	モスリン	大正	八掛外掛布団裏地	
125	綸子	戦後	訪問着	
126	ウール	戦後	日常着	
127	ウール	戦後	着物	
128	ウール	戦後	着物	
129	お召し	戦後	外出着	
130	お召し	戦後	同上	洗濯による傷み
131	羽二重	大正5年	男性羽織裏	邦義

図版 I



1 布地帳 (収蔵番号184802)



2 クリアファイルに添付された端布の付箋と趣旨書き



3 布地帳No.2の羽二重の付箋



4 布地帳 (江別市郷土資料館、収蔵番号 014455)



5 布地帳作成の趣旨書き



6 北海道立図書館に寄贈した品々の写真



7 新聞切り抜き (北海道新聞 1992年1月5日付朝刊)

図版 II



1 丹前（個人蔵 布地帳No.85）



2 袴（江別市郷土資料館、収蔵番号014412）



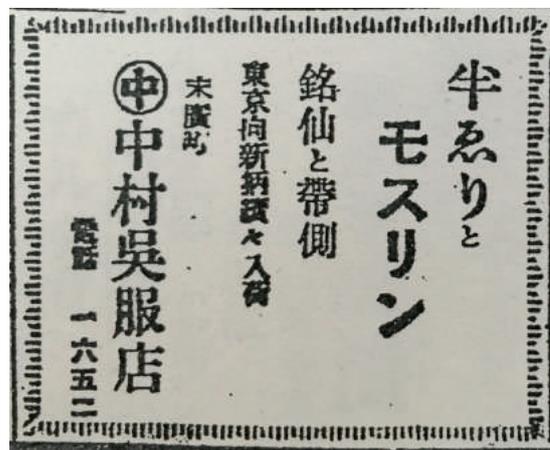
3 綿入れ袷纏（江別市郷土資料館、収蔵番号014417 布地帳No.14）



4 道行き（江別市郷土資料館、収蔵番号014414 布地帳No.33）



5 羽織（江別市郷土資料館、収蔵番号014413 布地帳No.34）



6 呉服店広告（『函館毎日新聞』1923.11.30付け、夕刊）

## The History of Clothing of the Gotoh Family, as Seen through Fabric Remnants

Naoji FUNAYAMA, Kaori OMAGARI, Takao IKEDA

This study is an interview examination relating to the transition of lifestyles of Hokkaido residents before, during, and after the war. The object of examination is a collection of cloth cuttings from sewing work done for family members by a housewife born in the Meiji period (1868-1912). The aim of the examination is to clarify what sort of transitions occurred in the family's clothing during and beyond the Taisho period (1912-1926), which saw a popularization of western clothing from traditional Japanese clothing. In this study, we interviewed the creator of the collection of cloth cuttings to investigate the particular characteristics of the cloth remnants, focusing on the period of use, the types of the fabrics, the users, and the purposes of use.

Divided by period of use, the cloth remnants consist of one piece from the Meiji period (1868-1912), 56 pieces from the Taisho period (1912-1926), and 74 pieces from the Showa period

(1926-1989). These quantities are proportional to the increase in household members of the Gotoh family: they were wed and their first son was born in the Taisho period; then their first daughter, second son, and second daughter were born in the Showa period. However, if the types of the fabrics are categorized based on the period used and purpose of use, we find that during the Taisho period, much of the cloth is tsumugi (pon-gee), habutae silk, meisen silk, or muslin, and was used for the married couple's clothing. And, in the Showa period, we find an increase in muslin, wool, cotton, and synthetic fiber fabric types. Further, in the Showa period, while kimono cloth for the husband's clothes decreases, we find baby clothes for the children made of fabrics such as Fuji silk and muslin.

These observations of the collected cloth remnants provide insight into the lifestyle of the Gotoh family from around 1916 to 1955.